

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 9 月 9 日現在

機関番号：11301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05594・19K20802

研究課題名(和文)近世後期江戸語終助詞の階層性と体系

研究課題名(英文)The Hierarchical Structure of Sentence-Final Particles in Late Early Modern Edo Japanese

研究代表者

黄 孝善 (HWANG, HYOSUN)

東北大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：80828848

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：江戸語の終助詞は相互承接する際に一定の順番がみえる。そこで、13種類の終助詞を分析すると、終助詞は、他の終助詞より、常に前に位置するものをA類「か、わ、ぜ、ぞ」、前にも後ろにも承接するものをB類「や、よ、い、さ、な」、常に他後ろにだけ承接するものをC類「の、ね、え、す」に分けられた。また、これらの終助詞が複合的に用いられる際にはA類 B類 C類の順に承接するという一定の体系が存在すると思われた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、文末に用いられている江戸語の終助詞が相互承接する際に承接順による階層性があり、一定の体系があることを明らかにした。また、終助詞の体系のなかには終助詞の意味が関係することを概略的分析を行ったものである。このように終助詞だけを中心にして、意味と体系を明らかにしようと研究は日本語史上にみられないもので、研究史上重要な位置を示す。また現代語の終助詞の研究にも役に立つものであると思われる。

研究成果の概要(英文)：A set order of succession can be observed when multiple sentence-final particles (SFPs) are used together in Late Early Modern Edo Japanese. We can break Edo Japanese SFPs into three groups (A,B,C) based on their behavior when co-occurring with other SFPs. Group A SFPs (ka, wa, ze, zo) always come first in a chain of SFPs. Group B SFPs (ya, yo, i, sa, na) can both precede and follow other SFPs in a chain. Finally, group C SFPs (no, ne, e, su) always come at the end of a SFP chain. When SFPs from the three groups are used together as compound particles, they always occur in the order A > B > C, demonstrating a hierarchical structure of SFPs in Edo Japanese.

研究分野：日本語学

キーワード：体系 承接 階層性 基本的な意味 終助詞 江戸語

1. 研究開始当初の背景

- (1)近世江戸語のなかには、文末に「わな」「ぞえ」などのように終助詞が複合的に用いられているものがあり、相互承接する際に階層性が存在するように思われた。この階層性について田野村(1994)の研究がある。田野村は、江戸語終助詞について、他の終助詞の前にだけ位置する終助詞をA類(か、ぞ、ぜ、ぞ、さ、わ)、他の終助詞に前にも後ろにも位置する終助詞をB類(よ、え、い、や)、他の終助詞の後ろだけ位置する終助詞をC類(の、ね、な)に分類する。この田野村の分類は、終助詞の承接による体系を初めて描いたもので画期的なものである。しかし、田野村の分類はいくつかの問題点がある。田野村は、上記の分類したものについて同類に属している終助詞はお互いに承接しない、また終助詞はA類 B類 C類の順に承接するという。しかし、江戸語終助詞には、「わさ」「やい」のように田野村の分類での同じ類のものがあり、また、「わさ」「やさ」のようにB類がA類の前に承接する、逆のものもある。そこで、複合用法に使われている江戸語終助詞についてその承接順を全体的に再調査して、把握しなければならなかった。
- (2)また、田野村は、それぞれの類について考察を行っていない。したがって、当初では、承接順による終助詞の体系(A類、B類、C類)についてそれぞれの類が持つ共通の意味、つまり、なぜ終助詞が承接順による体系を持つかが明らかにされていなかった。
- (3)最後に研究当初は、江戸語の終助詞について、その基本的な意味について明らかになったものは「わ、ぞ、ぜ、よ、ね、さ、な、え」であり、その他の終助詞の基本的な意味は明らかにされていなかった。

2. 研究の目的

- (1)近世江戸語の文末に用いられている複合用法の終助詞を調査して、その承接順を把握し、その体系を描き出す。
- (2)描き出した承接順による体系についてそれぞれの類の意味を明らかにする。
- (3)それぞれの終助詞が持つ基本的な意味と体系について関連性を検討する。

3. 研究の方法

- (1)終助詞は対話のなかで現れるという特徴がある。そこで、近世江戸語の資料のなかで、当時の会話分かる「滑稽本」「洒落本」「人情本」を選択した。そのなかに江戸語で書かれていると思われる作品を選定した。その結果、「滑稽本」は「浮世床」(日本古典文学全集、小学館)など7作品、「人情本」は「春色梅兒誉美」(日本古典文学体系、岩波書店)など7作品、「洒落本」は「甲斐神話」(洒落本大成、中央公論社)など20作品、全部34作品を選定した。
- (2)選定された作品を丁寧に読みながら江戸人による会話のなかで、複合用法に用いられている終助詞の用例を収集し、アルバイトを雇用してデータ化した。対象終助詞は「か、わ、ぞ、ぜ、や、さ、よ、い、な、ね、の、え、す」という13種類である。このときに、上方語や方言と思われるものや、長音と思われるものは対象外にした。
- ・米：「大義気兼をして居るのに、どうふすればそんな気だろウネ工
「春色梅兒誉美」 米八 丹次郎 p.182 の9行
上記の例は、終助詞「ネ」の後ろに「工」があり、長音と思われて対象外にした。以上の基準を元に収集した複合用法の終助詞の用例は全1,541例であった。
- (3)次は、収集した複合用法の終助詞について、時期の調査対象の13種類の終助詞をそれぞれ基準の終助詞とし、その承接順番とその数を分析する。また、終助詞の承接順を元に終助詞の承接順による終助詞の体系を描き出す。
- (4)承接順による体系について、その順番になった理由を何か、それらの共通点は何かについて考察を行い、最終的に江戸語終助詞の体系を描き出す。

4. 研究成果

- (1)今回の研究で一番大きな成果として取り上げられるのは、近世江戸語の終助詞に対する多くの用例を収集とデータ化することが出来たという点を取り上げられる。現在、国立国語研究所の日本語歴史コーパス(CHJ)でも江戸語の作品が一部公開されている。しかし、それだけでは今回の江戸語終助詞の体系を描き出そうとするには十分とは言えない。本研究では、日本語歴史コーパスに登録された作品以外のものも広く収集することが出来てより江戸語終助詞の体系について精密な分析ができたと思われる。また、終助詞の体系だけでなく、今後終助詞の意味や対話のなかでの終助詞の役割などの今後の研究にも役に立つだろう。
- (2)承接順による江戸語終助詞の体系の完成
「か、わ、ぞ、ぜ、や、さ、よ、い、な、ね、の、え、す」という13種類が複合用法に用いられている近世江戸語の終助詞は、全34作品のなかで、1,541例がある。この1,541例の複合用

法の終助詞をその承接順を調べた結果、表のように得られた。

表は、他の常に終助詞の前に位置するものが A 類（か、ぞ、わ、ぜ）、他の終助詞の前にも後ろに位置することができるものが B 類であるが、そのなかにはさらに承接順があり、B1 類（や）、B2 類（よ、い、さ）、B3 類（な）に分類された。さらに、常に他の終助詞

の後ろにだけ位置する終助詞は C 類（の、ね、え、す）に分類された。この分析は、日本語の文法史のなかで、従来の分析よりも精度の高い分析であり、江戸語の終助詞だけでなく、現代語の終助詞の分析にも役に立つものであると思われる。

(3)終助詞の体系と対話調整

また、終助詞の体系のなかで、それぞれの各々の意味の共通点については概略的であるが、以下のようなことが明らかにされた。

A 類は「新しい認識を示すもの」、B 類は「情報が自分側にあるものとして示すもの」、C 類は「情報をまだ受け入れていないことを示すもの」と考えられた。

上記の A 類から C 類までの分析は、一部の終助詞（か、や、い、の、す）の意味が明らかにされていない状態で概略的分析によるものであるが、終助詞が対話を行う際にどのように対話調整を行われているかということがわかるもので、終助詞が対話調整の機能を持つことが予想された。

今後、さらなる分析を行い、研究が進めることで、現代語で行われる「対話」についての研究と同様に江戸語を通じて共時的な研究が可能であると思われる。

表・江戸語終助詞の体系

分類	終助詞
A 類	か ぞ わ ぜ
B1 類	や
B2 類	よ い さ
B3 類	な
C 類	の ね え す

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 黄孝善	4. 巻 59
2. 論文標題 近世江戸語終助詞の階層性と体系	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語学研究	6. 最初と最後の頁 414-429
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----